

お茶の水女大家政 ○谷口 彩子
東京家政学院大 亀高 京子

目的 わが国における家政学が学問として認められたのは、第2次大戦後の新制大学に家政学部が設置された時である。この時期は民主主義国家への出発というわが国歴史上の一大転換期であった。しかし、女子大学の設立・家政学部の設置を求める動きは、既に戦前に於て、東京・奈良の両女高師や日本女子大学校を中心とする女子大学昇格運動としてみることができる。本研究は、それぞれの時代背景をふまえ、家政学成立過程に関する研究の一環として、その経緯とその後の展開について史的考察を試みることを目的とする。

方法 文献法によった。戦前の女子大学設立・家政学部設置に関する資料、家政教育・研究に関する資料を用い、昭和20・30年代に刊行された家政学原論の著書を参考にした。

結果 東京女高師は、明治末期から教員養成の性格を持つ女子大学への昇格運動を展開していき、大正期に入って湯原元一校長の時代に、女子大学に設置すべき家政学部の学的充実を図る積極的活動が見られた。以後、戦中の教育審議会に至るまで、家政学部を女子大学に設置しようとする機運は高まりをみせていくが、戦局の激化により実現には至らなかった。一方、日本女子大学校では、創設者成瀬に蔵の女子教育思想に基き、家政学部を中心に据えた女子大学構想を明らかにしていくが、当時の大学令の下では女子大学の設立は認められなかった。これらの女子大学昇格運動の中で常に議論されてきたのは、女子大学は時期尚早であるという意見とともに、家政学は学問としての体系をとりうるのか、家政学は諸学の寄せ集めで学としての蘊奥がない、という問題点であった。戦後、この問題点を解決すべく提唱されたのが家政学原論である。